みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

一章　マヤ文字の解読にむけて

グアテマラのマヤ族

歴史を語りはじめたマヤ文字

マヤ文字をはじめて見る人は、こうたずねるにちがいない。

「これは、いったいなんですか」

マヤ文字です、とこたえると、少し落ち着いてきて、

「へえー、これが文字ですか。絵みたいでとても文字にはみえないですね」

マヤ文字は、これはなに、と一瞬問い返さざるをえないほど、複雑怪奇な文字である。過度の装飾がほどこされ、まるで空白を恐れるかのように、石にぎっしり彫り刻まれている。ちょっとみただけでは、圧倒されてしまって、なにかわからない。しかし心を落ち着けてよくみると、まるで絵のようで、みているだけで楽しくなってくる。人間や動物の顔をかたどった絵画的な文字や抽象化した幾何的な文字など、一つ一つが芸術作品をみるようである。あまりの美しさに、ほんとうに文字なのか疑問に思えてくるほどである。

マヤ文字はいったいなにを書き記したものなのだろうか。長いあいだ、それは謎であった。暦の文字が碑文にはあふれていたので、流れゆく時に対するマヤ人の深遠なる哲学を記したものだと思われてきた。わけのわからない複雑な文字が、とてつもない時を刻んだ、神秘的な解読不可能な文字とみられて、なんの不思議があろう。

しかし、マヤ文字はほんとうに解読不可能な文字なのだろうか。果てしない時の流れを刻んだ、神秘の文字なのだろうか。そうではない。マヤ文字は、もはや神秘の文字ではなくなった。その不思議な文字が、私たちに語り残したものを理解できるようになってきた。

マヤ文字は、表音文字、表語文字、表意文字の混合体系をもつ文字であった。意味を表わす意符と音を表わす音符からなる漢字とおなじような構成の文字もみつかっている。

古代マヤ社会もマヤ文字のおかげで明らかになってきた。たとえば、六八二年五月四日にマヤ世界の中心地ティカルで、「月の向い合わせのくし王」とあだ名されている通称A王が即位したことや、その王が娘を一一六日後に東のナランホという町へ嫁がせたこと、その彼女がナランホへやってきて五年後に、のちに「ひげリス王」となる子を生んだことなど、マヤの王朝はマヤ文字の解読から急速に理解されるようになってきた。

解読競争がはじまって一二〇年あまりたつ。だが、マヤ文字の性格がわかりはじめ、そのような歴史が解明されるようになったのは、ほんのここ二〇年あまりのことにすぎない。それまでは長いあいだ、マヤのテキストには暦や天文のことしか記されていないと信じられていたのである。マヤ人は、時間の計算に没頭し、時の記録を石碑に残すことに夢中になった、なんとも不可思議な民族だと考えられていたのである。

たしかに碑文は暦の文字でいっぱいであった。正確に時を刻むのには莫大なエネルギーが費や

されたにちがいない。しかしマヤ人も、文字をもっていたほかの古代民族の例にもれず、自己を主張し、自己の歴史を石碑に刻んでいたのである。

古代の謎につつまれた社会の歴史が徐々に解明されはじめている。それも、暦や天文や数理しか刻まれていないと信じられていた碑文の研究から再構成された歴史である。謎を秘めた文字からみた歴史とは、そしてマヤ文明とは、いったいどんなものなのであろう。

マヤの歴史や古代マヤ人の生活を探る手がかりは、碑文や絵文書などの文字資料にある。しかしそれだけではない。考古学者は、百年以上にわたり、土器や石碑、神殿、住居址などを発掘し、編年作業や他文化との比較を行なってきた。美術史家は芸術様式の発達過程を研究し、言語学者は現代語との比較研究から古代語を再構成したり、部族の移動や言語間の関係を推測してきた。民族学者は現代マヤ人の文化を研究し、古代マヤの社会や経済組織の再構成の手がかりを求めてきた。こうした諸々の研究から、マヤ文明はどんな文明であったか解明されつつある。

しかし、マヤ文明にはいまだに多くの謎がある。それゆえいろいろな角度から研究されていかなければならない。その研究はどれもこれもおもしろい。だがそのなかで一番おもしろいのは、やはりマヤ文字の研究ではなかろうか。というのは、マヤ文字は、新大陸で唯一といってもよいほど発達した文字体系をもっており、しかもその文字が歴史を語りはじめたからである。また、文字は文明の条件の一つに数えられるものである。文字というのは、それを創った人やそれを用

いた人々の知識の凝縮物といえるものである。そう考えると、文字の謎を解くことは、それを使用した人々の知識体系を明らかにすることになるし、その文字をもっていた文明を明らかにすることにもなる。逆にいえば、文字を解読するには、マヤ文明というものを知らなければならないということである。つまりマヤ文明すべてを研究する総合学問である、マヤ学を必要とする。

もちろんマヤ文明は、文字からだけでは説明することはできない。文字からみたマヤ文明とは、マヤ文明のもっとも栄えた古典期（二九二～九〇九年）の、それも文字をもっていた一階級の説明でしかない。それはたしかにおもしろい。しかしそれだけではマヤ文明全体の記述にはならない。だが、文字を解読するためには、マヤ文明というものをある程度知っていなければならない。また、マヤ文明の研究は、とくにこの一〇年あまりのあいだに急速に進み、マヤ観もそれまでとは違ったものになりつつある。

そこでまず、最近の研究の成果をふまえ、文字の理解に必要な背景がわかるよう、マヤ文明について述べることからはじめよう。そのあとマヤ文字をみていくために必要なことを二、三述べ、徐々にマヤ文字にはいっていくことにしよう。

マヤ文明の栄えた土地

マヤ文明の展開した地域は、グアテマラのペテン州のジャングルを中心に、北はメキシコのユ

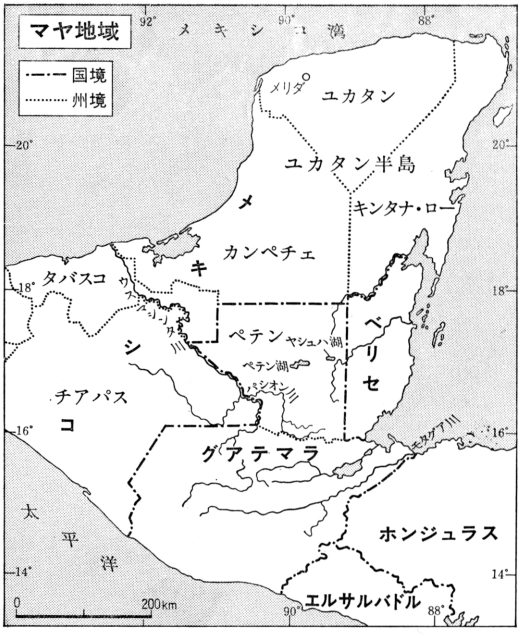
カタン半島の諸州、西はタバスコ州とチアパス州の東半分、南はグアテマラの山岳地帯、東はベリセ全土、それにホンジュラスとエルサルバドルの西部が含まれる。面積にして約三〇万平方キロメートルにおよぶ広大な地域で、地形、気候とも変化に富んでいる。

地理的には、高地と低地の二つに大きく分けることができる。ユカタン半島の中心地メリダからグアテマラに飛行機で北から南へ行くとき、目にする光景はみごとである。緑のじゅうたんをしきつめたような平面、それは北から南に行くにしたがい色が濃くなり、川や湖がふえていく変化をみせるのだが、一面の見渡すかぎりの平野が、急に盛りあがってグアテマラの山々を形づくる、そのあざやかなコントラストを前にしたとき、だれしも自然の造形の美しさに感動せざるをえないであろう。高地と低地は、それほどはっきりした境をもっているのである。

高地とは、グアテマラからメキシコのチアパス州にかけての山岳地帯をさす。四〇〇〇メートルを超す山々、湖、川、それらがおりなす景色は美しい。しっとりとした緑にかこまれて、土地固有のあでやかな民族衣裳をまとったインディオが、昔さながらの素朴な生活を営んでいる。グアテマラに住むインディオは現在はすべてマヤ族であり、キチェやカクチケルなどの部族が、大部分は一〇〇〇メートルから二五〇〇メートルの気候のいいところに住んでいる。苛酷な熱帯低地と比べると、さながら常春の楽園のようである。

マヤ文明史上、ここは重要な影響をまわりに与えてきた地域であり、グアテマラの太平洋岸の

低地帯ともども、見過ごすことのできない地域である。また、ここに住むマヤ族は古いものをたくさん残しており、マヤ文明を研究する上でも重要である。しかし高地は、あくまでマヤ文明の周辺地域でしかなかった。



マヤ文明が栄えたのは低地である。低地北部のユカタン半島は、石灰岩の土壌の広がる平坦地で、川や湖がない。また雨量も少なく、セノテと呼ばれる自然の井戸がほとんど唯一の水源となっている。そのため北部はいばらの灌木のおい茂る乾燥地帯であるが、南に行くにしたがい雨量もふえ、熱帯雨林のジャングルとなる。南部にはウスマシンタとモタグアという二つの河川系があり、ペテン湖やヤシュハ湖などの湖も存在する。一年は乾季と雨季に分けられ、

雨量は北端では年間四五センチくらいであるが、南に行くにしたがってふえ、南端では三〇〇センチに達する。

マヤ文明がもっとも栄えたのは、低地でも南半分のジャングル地帯である。三世紀から九世紀にかけて栄えるが、十世紀には放棄されて、人はほとんど住まなくなる。低地北部も紀元前はるか昔から人が住み、活動があったが、南部とはいくぶん異なった展開をする。そして、低地南部が十世紀に放棄されたのちも、ひきつづき栄える。生態学上、北部と南部は異なっていたわけだが、文化史的にも、このように低地は北と南に分けることができる。

物理的環境の違いが地域ごとの文化の表現に影響を与えているのであろう。低地は北部と南部に分けられるが、自然環境の違いや芸術様式の違いから、さらに一三に細かく分けることができる。私たちがこれから検討する文字はこれらのどの地域にも存在するが、中心となるのは、中央部やウスマシンタ流域などの低地南部の諸地域である。なかでもワシャクトゥンやティカルなどがある中央地域が文化革新の中心的役割を果たしていた。

メソアメリカ文明のなかのマヤ文明

マヤ文明といえば、低地熱帯ジャングルで発達した文明であること、石器時代の技術ですぐれた文明を生みだしたことなどの、他文明と比較した場合に浮かびあがる特徴のほかに、擬似アー

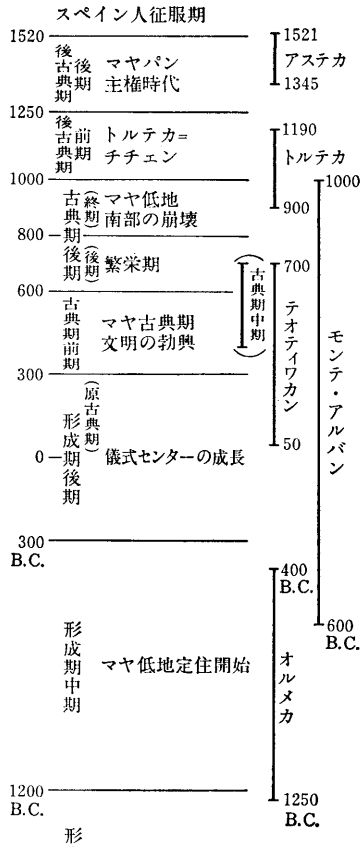
チや棟飾りなどに特色をもつ建築や、石碑と祭壇と建築物の複合、土器、複雑に発達した暦や神神の体系、文字などの特徴をあげることができる。

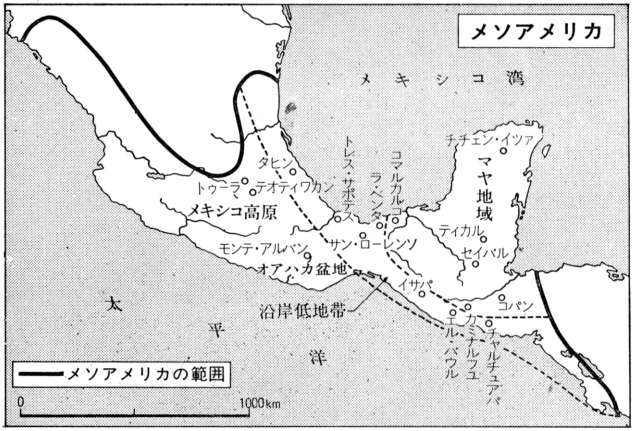
しかしこうした特徴をもつマヤ文明も、メソアメリカという文化領域のほぼ東の端で栄えた文明でしかなかった。メソアメリカには、メソアメリカの母なる文明とも呼ばれるオルメカをはじめ、テオティワカン、サポテカ、タヒン、トルテカ、アステカなど、数々の文明があった。こうした文明とマヤ文明は、神々の体系や暦、生活形態など、多くの特徴を共有している。また、マヤ文明は、テオティワカンやトルテカなど、メソアメリカの諸文明からさまざまな影響を受けつつ発達した文明でもあった。それゆえ、マヤ文明はそうしたメソアメリカの文明の

一つとしてとらえていかなければならない。

メソアメリカに人が住みはじめるのは、いまから一万年以上も前のことである。最初のアメリカ人は、ウィスコンシン氷河期に、ベーリング海の水位が下がりアジアと陸つづきになった、いまから五万～九千年前のあいだに、何度かにわたってアジアから新大陸にやってきた人々である。

最初のインディオがアメリカ大陸にやってきたときには、マンモスやバイソンなどの大型草食獣が闊歩する草原であったようだ。彼らがそうした大型獣を狩猟し生活していた証拠を、合衆国やメキシコなどの露営地や野外遺跡にみることができる。ところが紀元前七〇〇〇年頃気候が温





暖になり、大型草食獣が絶滅すると、インディオたちは、小型獣の狩猟や木の実や根茎の採集生活にはいるようになる。やがて、トウモロコシやカボチャ、豆などの基礎作物の栽培化が、長いあいだかけて少しずつおこる。そして農業に基礎をおいた定住生活がはじまり、土器が作られるようになる。

土器をもった定住生活がはじまるまでを古期という。それ以後は、形成期(紀元前二〇〇〇～三〇〇年)、古典期(三〇〇～一〇〇〇年)、後古典期(一〇〇〇～一五〇〇年)に時代区分される。古期から形成期にかけての発達過程は、メキシコの北東のタマウリパスの洞穴や岩陰、プエブラ州のテワカン盆地などにみることができる。まだ文明と呼ぶに価しない、小さな村落段階であった。

形成期中期(紀元前一二〇〇～紀元前三〇〇年)には、マヤ地域のすぐ西、タバスコからベラクルスの低地帯にオルメカ文明がおこる。サン・ローレンソ、ラ・ベ

ンタ、トレス・サポテスを中心に、多数の人を組織してこしらえた大神殿や、ジャガーの顔と赤ん坊の顔が結びついたジャガー＝人間のモチーフ、玄武岩で作られたニグロイド的な顔をもつ巨頭など、独得な芸術が生みだされた。オルメカ文明がメソアメリカの諸地域に与えた影響は大きく、メソアメリカの母なる文明と呼ばれるほどである。

紀元前六〇〇年頃には、オアハカ盆地に、文字の原形が現われる。サン・ホセ・モゴテの石碑3やモンテ・アルバンの石碑12や石碑13、三一〇個ほどある『踊る人』と呼ばれる石碑群には、点と棒による数表記や暦、一見して暦と関係のない、人物を表わすと思われる文字まで刻まれていた。そして紀元前後には、長期暦という、いわば絶対暦を記すことができる暦が、タバスコからグアテマラの太平洋岸にかけて出現する。

形成期中期から後期にかけては、ベラクルスやタバスコ沿岸、オアハカ、チアパス、グアテマラ太平洋岸の、マヤに接する地域に高い文明がおこったのであった。

マヤでは従来、形成期は紀元前九〇〇年頃からはじまるとされていた。パシオン流域のアルタル・デ・サクリフィシオスやセイバルでみつかったシェやレアルと名づけられた土器が最古のものと考えられていたのである。

ところが、一九七三年からはじまったベリセ北部の調査、発掘から、マヤの形成期は紀元前二六〇〇年頃からはじまることがわかるようになってきた。メソアメリカの形成期の初めよりさら

に六〇〇年も前である。スワジー式土器と名づけられた土器が紀元前二六〇〇年から紀元前一二五〇年にわたる期間、つまり、形成期前期に用いられていたのである。

この土器は、最古の原始土器とは思えないほどさまざまな形態や表面仕上げをもっており、できばえもすぐれていた。土器が原始的な特徴をもっていないということは、それに先だつ発展段階があったか、それとも、その当時文化の進んでいたコロンビアのプエルト・オルミーガやエクアドルのバルディビアやレアル・アルトからの影響があったと考えることができる。しかしおそらく、最初からマヤの地で発達したものであろう。というのはベリセ北部の同地域で、すでに紀元前九〇〇〇年頃から人が住んでいたという証拠が発見されたからだ。土器の原型はまだ発見されてはいないが、将来発見される可能性は大きい。その起源は、マヤの低地の土の下にうずもれているにちがいない。発掘の中心となったクエリョの遺跡では、スワジー期に属する墓が五つもみつかったが、その埋葬品に、その地ではとれない宝石（緑石）や貝の首飾りなどがあり、その頃すでに交易が行なわれていたこともわかった。

従来、マヤの形成期は紀元前九〇〇年頃、パシオン流域ではじまるとされていた。しかし、スワジー期の年代はいまだ流動的であるとはいえ、ベリセ北部の歴史がこのようにさかのぼれるとすると、オルメカ文明とマヤとの関係を考えなおさなければなるまい。オルメカはマヤ人だったという意見もあるが、そうでなくても、少なくともなんらかの関係があったにちがいない。

これらの初期の村落は、川沿いの肥沃な地に栄えたということに注目する必要がある。メキシコ高原のチナンパのように、水をうまく利用して、湿地に盛り土をした土地での耕作が行なわれていたのではないかと最近の調査から考古学者は推測している。定住生活の基礎となる農業形態は、マヤ文明の特徴の一つでもある焼畑農業とは違った形だったのではないだろうか。

紀元前六〇〇年頃には、川沿いから内陸部にも人々は移住し、川のないペテン中心部でも定住生活がはじまる。マモム期とも呼ばれる形成期中期の終り頃（紀元前六〇〇～紀元前三〇〇年）は、人口が増大し、交流が盛んになり、均一化がおこりはじめた時代である。北はチビルチャルトゥンから、南はエルサルバドルのチャルチュアパにいたるまでの、いろいろな場所で人々が活動しはじめた証拠があがっている。その頃には、マヤの地のいたるところで人々が生活していたのである。しかし公的建築物はまれで、ぜいたく品の出土もなく、小村段階でしかなかった。

形成期後期（チカネル期）になると、人口はさらに増大し、各居住地が拡大し、儀式建築が生まれ、ひすいや貝などのぜいたく品が出現しはじめる。埋葬品に差がでてきて、はっきり社会が階層化してくる。

しかし地方により発達の仕方は違っている。たとえばティカルでは、紀元前二〇〇年頃から人口が増大し、新しい装飾技術をもった儀式用土器や儀式的性格をもつ建物が現われるようになる。そして紀元前五〇年から一五〇年のあいだには、天井をもつ墓やさまざまな色で仕上げられたス

タッコー製の仮面をもつ大神殿が建てられる。その間人口はふえていない。ところがアルタル・デ・サクリフィシオスでは人口は漸増、ベリセ北部では、初期の四倍に急激に増大したあと、ゆっくりふえつづけている。北ユカタンのチビルチャルトゥンでは、紀元前二五〇年から紀元前一〇〇年にかけて、文化的な頂点に達したあと、人口は減少し、公共物の建造が止まる。リオ・ベック地方では紀元前三〇〇年から紀元前五〇年に人口は漸増し、大建築が紀元前五〇年から二五〇年にかけて発達する。

このように地方的差があるものの、二五〇年までには、マヤ文明の一大特徴である擬似アーチが建築に使われるようになり、文字をのぞいてマヤ文明の特徴となるものはすべてでそろう。

マヤ文字の登場

マヤ文明の最大の特徴である文字が最初に現われるのは、ペテンの中央部のティカルであった。二九二年の時を刻む最初の石碑、ティカルの石碑29は、発達した文字体系をもち、技術的にも洗練されている。それゆえ文明が、突然発達した形で、ペテンの中心地ティカルに現われたような印象を受ける。しかし実際は、原古典期とも呼ばれる、紀元前後から三〇〇年のあいだに、チアパスからグアテマラの太平洋岸一帯に栄えた、イサパやエル・バウル、さらにはカミナルフユなどの当時文化の進んでいた地域から、多くのものを受けついでいたのであった。以前は、マヤ文

字の起源はマヤの地にあると考えられていた。文字の原形は、木材などの腐食する材料に刻まれていたため後世に残らなかったのだ、と解釈されていた。しかし、マヤの初期の石碑群とイサパやカミナルフユなどの石碑を比べてみると、いかに多くのものをマヤ人が受けついでいるかが納得できる。たとえば、点と棒による数表記、長期暦の体系、文字の基礎、長鼻の神、石碑の上部で下を見おろす身体をもたない神、首飾りや帯飾りなどの芸術様式、浅浮彫りの技法、石碑と祭壇を対に用いることなどを数えあげることができる。

マヤ文明がどうしておこったか、いまだに謎であるが、イサパやカミナルフユの影響があったことはまちがいないだろう。北からの影響もあっただろうが、おそらく、エルサルバドルのチャルチュアパからベリセを経由してペテン中央部に伝わっていった流れが一番大きいにちがいない。

文字をもったマヤ文明が最初に現われたのは、ペテンの中央部である。二九二年から最初の一〇〇年あまりは、その範囲はわずかペテンの中心地から東西二九キロ、南北一一〇キロに限られていた。それがやがて、北はユカタン半島の北端から、南はグアテマラ高地まで、東はホンジュラスとエルサルバドルの西部、西はタバスコのコマルカルコまで広がったのである。

マヤ古典期

文字をもつようになってからマヤ文明は真に文明たる高みに到達した。この時代を古典期とい

う。古典期とは文明のもっとも栄えた時期のことで、マヤでは、碑文が刻まれた年代である二九二年から、九〇九年までの期間をさす。古典期は前期（ツァコル期）と後期（テペウ期）に分けられる。だいたい六〇〇年までが前期であり、それ以後の三〇〇年が後期である。

前期はマヤ以外の地からの影響が強く、前期の前半はイサパやカミナルフユ、後半はメキシコ高原のテオティワカンの影響を受けている。テオティワカンは紀元前後からメキシコ市の北東約五〇キロのところに発達した文明で、最高頂のときには十万人以上の人口があったという、メソアメリカ最大の都市である。テオティワカンの影響はメソアメリカのいたるところにおよんでおり、そのため、その影響が強かった四〇〇～七〇〇年を古典期中期と名づける人もいるほどである。マヤ文明もその強い影響を受けているが、以前はグアテマラ高地のカミナルフユを前哨基地として、そこから間接的に影響を受けたと考えられていた。しかし、テオティワカンの影響は、ベリセ北部のアルトゥン・ハで二世紀の中頃にすでにみられる。それゆえ、テオティワカンとカミナルフユ、さらにはマヤという関係をもう一度考えなおす必要が生じてきている。

テオティワカンの撤退と関係があるのか、マヤ文明は六世紀の中頃から活動が弱まり、何らかの混乱がマヤ世界におこる。石碑は五三九年から五九八年までの六〇年間、中心部ではほとんど建てられなくなる。暗黒時代といってもよいこの六〇年間は、三〇〇年後におこるマヤ文明の謎の崩壊の〝リハーサル〟と呼んでもよいくらいに、活動の止まった時代である。

六〇〇年頃からマヤ低地文化は力強く再生し、古典期後期、まさにマヤ文明といえる時代にはいる。後期文明は、暗黒時代の六〇年の存在や土器様式の違いなどから、前期とははっきり分けられるが、構造的にもやはり違う。つまり後期は、前期と比べて一層エリート階級と一般層との差が大きくなる。宮殿と名づけられている部屋をたくさんもった建物が多くなることや、墓の型や装飾が精巧になること、ぜいたく品の出土などからそのように考えられるのである。碑文は長文になり、王朝の家系や即位、戦争などの内容が刻まれる。強大な権力をもった王を中心に、階層化が進み、工芸や通商が栄えた。各儀式センターの人口がふえる。都市間にも階層化が生じ、従属—支配の関係も生まれた。

マヤの社会

マヤ文明が最高潮に達した六〇〇年から八〇〇年頃の社会はどのような社会であったか、興味がわくのだが、まだ十分にわかっていない。しかし本書でのちに行なうテキストの分析からわかるように、王や王の一族が支配していたことはまちがいない。王家と王家は血縁関係にあったばかりでなく、商業的な交りもかなり頻繁に行なっていたことは、碑文ばかりでなく、考古学的調査からも想像がつく。ペテンにない黒曜石やひすいやケツァル鳥の羽などをグアテマラ高地から得たり、塩をカリブ海沿岸から得たり、そのほか必要なものやぜいたく品を遠い地方から調達し

ていた。こうした商業をとりしきる商人階級もいたであろうし、建築物や工芸品を作る人々もいたであろう。十六世紀に記されたユカタンの記録にもあるように、王や神官や貴族などのエリート層は、神殿や宮殿などの石造建築群がある中心地や近くのしゅろぶきの家に住み、また陶芸家や彫刻家などの、エリート層と密接な関係をもつ中間層は、中心からさほど離れていないところに住んでいただろう。そして下層の農民は、中心から離れたところに住んで、農作業に従事するかたわら、建築に労力を提供したり、長距離通商の荷担人として働いていたにちがいない。

以前は、マヤ社会は、神官階級の支配する平和な社会と思われていたが、そうではなく、戦争や略奪など、血なまぐさい事件のあいついだ、ほかの民族の歴史と少しも変わらぬ世界であったこともわかってきた。

また、住居址の研究が進み、遺跡の規模や人口がわかるようになってきた。たとえばティカルでは、中心部一平方キロメートルに六〇〇人もいたと推測されている。そうなると、従来いわれてきた焼畑農業では、そのような大人口を養えない。最近では考古学者は、マヤ低地の食料需給について、熱帯雨林のあてにならない焼畑農業のみに頼っていたのではなく、自然の産物の特性を最大限に生かした高度な営みが行なわれていたにちがいないと考えるようになっている。収穫期と種蒔期の違いを利用したり、収穫増大のために大規模な灌漑や段々畑を作ったり、根栽農業、果樹やラモンの木（breadnut）の利用、海産物の移入、動物の狩りなど、いろいろな手段や方法

で、食生活を豊かにしていたようである。

このように、少しずつではあるが、マヤ社会がどのような社会であったかわかるようになってきた。

マヤ文明崩壊の謎

だが、こうして発達した古典期文明も、八〇〇年をすぎると衰退に向かう。その一つとして、日付をもった石碑が建てられなくなったことをあげることができる。ピエドラス・ネグラスでは七九五年、ボナンパックでは八〇〇年、キリグアでは八一〇年というふうに、八〇〇年頃から石碑は建てられなくなる。同時に建築活動もやみ、やがて放棄されていく。

原因は定かではないが、マヤ文明は滅んでしまう。崩壊の原因は古くから研究されてきており、いろいろな意見もあるが、これまでに提出された崩壊の原因をまとめると、次のようになる。

内部的原因

自然的

1 土地の疲弊

2 人口増大

3 天災（地震・ハリケーンなど）

4　天候変化、旱魃
5　病気

社会政治的
1　農民の反乱
2　都市間の戦争

外部的原因
1　経済機構の崩壊
2　侵略

このようにいろいろな原因が考えられているが、これだというものはいまだにない。おそらくこれらの原因のいくつかが複合しておこったのだろう。また地方によって原因が違うのではないかとも考える必要があろう。たとえばティカルでは、急激な人口減少が末期におこるが、これなどは、人口増大によって食料供給が破綻し、慢性的栄養不良に加えて病気が蔓延した、さらに通商体系の崩壊が追い打ちをかけた、と考えてもよいであろう。これに対し、パシオン流域では、西からの侵略が大きな原因だと考えられる。

また、精神的な原因を考えてみることもおもしろい。ユカタンのマヤ人は二六〇年たらずが一周期の暦を使っていたが、その暦は古典期にもあった可能性が高い。マヤ人はある出来事は周期

的に繰り返すと信じていたが、古典期前期と後期はちょうどその暦が完了する期間にほぼ等しく、ある種の運命観に従って自らの住む都を放棄したかもしれない。

マヤ文明は突然ジャングルから消えたようにいわれ、それはマヤの不思議な謎の一つに数えられているが、けっしてそうではない。徐々にではあるが崩壊の謎も解けはじめているのである。

かつて栄えた低地南部では、タヤサルやトポシュテをのぞき、二度と活動がなくなり、舞台は低地北部に移る。後古典期のはじまりである。

以前は、南部で栄えた古典期を築いた人々が、なんらかの理由でそれまで空白であった北部に移り、その新天地で後古典期文明を築いたと考えられたこともあった。しかし北部の遺跡の発掘が進んだ現在、そのような古い空想的な理論は受けいれられなくなった。北部でも、形成期から人々が活動し、古典期には暦をもつ石碑が建てられるようになった遺跡がたくさん知られている。

形成期はほとんど南部と変わるところがない。しかし古典期にはいると、地方主義的とでもいってよい、ユカタン独自の道を歩むようになる。ユカタン・スレート土器と呼ばれる土器が現われ、リオ・ベック様式やチェネス様式やプウク様式と呼ばれる美しい建築物が建てられるようになる。

このように北部での展開は南部と異なるのであるが、両者が著しく違う点は、南部は古典期の終りとともに放棄されたのに、北部ではひきつづき人が住みつづけたということであろう。

マヤ後古典期

後古典期も前期と後期に分けられる。前期はメキシコ高原のトルテカの影響を色濃く受けたチチェン・イツァを中心とする時代で、後期はマヤパンを中心とする、多くの首長国の競いあった時代である。

ユカタンの歴史は、おもに文献から再構成されている。チラム・バラムの書などのスペイン人征服後の文献により、ユカタンの歴史は五世紀頃までさかのぼることができる。しかし短期暦という、二六〇年たらずで一周期をつくる暦を使っていたため、時代関係がはっきりせず、また、長いあいだに歴史が都合のいいようにゆがめられた可能性もあり、文献を中心に再構成された歴史はかならずしも正しいとはいえない。実際、最近の考古学的調査の結果との矛盾が指摘されるようになってきた。たとえば、文献では、九九七年から一一九四年まで、ウシュマル、チチェン・イツァ、マヤパンの三つの都市の同盟があったとされているが、考古学からは、ウシュマルは一〇〇〇年頃まで、チチェン・イツァは一二〇〇年頃まで、マヤパンは一二五〇年以後栄えたことがわかった。栄えた時代が重なりあわないから、三国同盟に関する記述、さらにはそれにもとづいた歴史はおかしいといえるのである。

このように、後古典期の歴史は文献があるにもかかわらず、いまだにはっきりしていない。よ

くいわれるトルテカの影響を受けたというチチェン・イツァも、逆にチチェン・イツァがトルテカに影響を与えた可能性もあり、ユカタンの歴史は十分に検討しなおす必要にせまられている。文献学的な研究と考古学的な研究から再考しなくてはならない問題がたくさん残っている。

一二〇〇年頃、チチェン・イツァは放棄される。そして一二五〇年頃からマヤパンを中心にしたマヤ文明の再生期ともいえる時代がおとずれる。芸術的には退廃期であるが、見方をかえれば、商人階級の勃興により、新しい秩序がもたらされた時代といえるかもしれない。

一四四一年、ユカタンの中心地であったマヤパンが滅んでしまう。そしてスペイン人の征服前の半世紀は、ハリケーンの襲来、飢饉や流行病などで、マヤ世界は混乱をきわめた状態にあった。

一五〇二年、マヤ人とスペイン人の最初の出会いがおこる。コロンブスの第四回目の航海のときであった。

マヤ文字の解読史

以上、スペイン人が征服する前までのマヤの歴史を簡単に述べてみた。マヤ文明の最盛期の古典期については、のちにもう一度述べることになろう。碑文の研究から、古典期がどのような社会であったか、少しずつわかるようになってきたからである。

文字をみるための背景として、マヤ文明の歴史を述べたが、もう一つ、別の歴史について述べ

ておく必要がある。それはマヤ文字の解読史である。

一八六三年、フランスの神父、ブラシュール・ド・ブールブールによりランダの『ユカタン事物記』が発見され、翌年出版されてから、マヤ文字の解読史ははじまる。『ユカタン事物記』とは、スペイン人の神父ディエゴ・デ・ランダが十六世紀の中葉に、ユカタンの歴史や自然などについて書いた書物であるが、そのなかに、暦の文字と、ランダのアルファベットと称される文字が記されていた。初期の学者がこのアルファベットを利用して、絵文書を読もうとしたのは当然であった。しかしわずか三〇個のアルファベットではうまく読めず、とうとう一九〇四年にその方法は放棄されてしまった。

マヤ文字解読史は三期に分けることができるが、一八六四年から一九〇四年の第一期は、文字を読もうとした期間ということができる。しかしもちろんこの期間に、マヤ文字は表意文字だとする人や、表音文字と表意文字の混合体系であるという考えをもつ人もいた。マヤ文字が表音文字か表意文字かの論争もあった。そしてそのあいだに、暦の仕組や神々の研究、文字の解読に必要な資料の収集や出版が行なわれた。絵文書にあったマヤ暦の仕組や金星暦、月齢表、倍数表の仕組が解明され、マヤ暦の起源や0の文字、方角や色を表わす文字などが発見され、多くの神々の文字も同定された。マヤ文字の読み順も決定された。しかし最初の四〇年間はやはり、文字を読もうとする、いいかえれば、表音的アプローチの時代であったということができる。

それが失敗すると、今度は、言語の知識がなくても理解できる暦に関する文字の研究に中心が移った。いわば表意的アプローチの時代である。この時代に支配的な考え方は、マヤの碑文にはただ暦や天文に関することしか記されていないという考えであった。碑文の三分の一を占めるといわれる暦に関する文字はほぼ理解できたが、そのため、あやまってマヤ文字は三分の一解読されたといわれることにもなった。実際は暦が解明されたにすぎず、マヤ文字資料の大部分を占める残りの文字は、なに一つ解読されなかった。

それら未解読の文字が、まがりなりにも理解されるようになったのは、一九五八年からである。いまだ多くの文字は未解読のままであるが、それでも、マヤのテキストの概要はわかるようになってきた。つまり、マヤの碑文には歴史が刻まれていることが証明され、文字からマヤの王朝史がわかるようになってきたのである。

文字の読み方についても、ソ連のユーリー・クノロゾフを中心にいくつかの成果があがった。今日にいたるまでの最近の二〇年間は、碑文から歴史をさぐる流れと、絵文書の研究から文字の読み方をさぐる流れ、さらにはこれまで無視されてきた土器の文字の研究の三つが、それほど密接な関係をもたず、並行に進んできた時代といえよう。

一八六四年から今日まで、マヤ文字の研究は多くの人々によってなされてきた。碑文と絵文書というマヤの二大テキストの内容は、現在では、ほぼ理解されるようになった。しかし個々の文

字をとりあげると、マヤ文字はまだまだ解読されているとはいいがたい。解読されるにはまだ時間がかかりそうである。その原因は、テキストがむずかしいことや、文字の資料が十分でなかったこと、解読の方法が悪かったことなど、いろいろ考えることができる。だがなんといっても、ロゼッタ石に相当する資料がなかったことが、もっとも大きな原因と思われる。

とはいうものの、遅々としてではあるが、解読は進んできた。いろいろな手がかりがあったからである。直接の手がかりはランダの書であった。しかし解読の助けとなる資料は、十六世紀のものから今日採集できる資料にいたるまで、かなりの量にのぼっている。マヤだけに限らない。多くの基本的概念を共有しているメソアメリカの諸文明からも有益な知識が得られた。マヤ文字を取り巻く環境は比較的恵まれていたので、ロゼッタ石はなかったけれども、解読は進んできたのである。

しかし、マヤ文字の解読史は別の方向からみれば、誤謬に満ちた歴史といえるかもしれない。解読者たちは好き勝手に自分の意見を発表する。それはたとえていえば、昨日述べたことを今日はまったく変え、別の説で発表する、といった具合である。ことに文字の読み方がそうであった。そのような無節操ともいえる態度がまかり通っていたのは、研究者が少なかったことや資料が足りなかったことなどによるかもしれない。だがもっとも大きな原因は、十分な知識をもった解読者が少なすぎたためではなかろうか。門外漢の学者がマヤ文字の解読に参加し、たいした根拠も

ないのに、もっともらしい説を唱えることも許された。そのためであろう、いたずらに文献がふえ、マヤ学はとっつきにくい学問になってしまった。

マヤ文字研究にむけて

ではマヤ文字を研究するのに必要な知識とは、いったいどんなものであろう。

第一に、あたりまえのことだが、マヤ文字を研究するのだから、マヤ文字に精通すること。テキストがどのようなことを扱っているのか。どのような文字であり、どのくらい文字があるのか。どのくらいの頻度で使われているのか。どんな場面に使われるのか。こうした知識が必要である。

第二は、マヤ文字はマヤ語で書かれたものであるから、マヤ諸語の知識が必要不可欠である。マヤ諸語は現在でも、マヤ文明が展開した地域とほぼ同地域に、約二五〇万の人々によって話されている。三〇ほどの方言に分けることができるが、少なくともそのうちの一つに精通していなくてはならないであろう。マヤ文字が用いられたのはいまから千年以上も前のことなので、そのころの言語を復元できる手段も知っておかねばなるまい。結局、マヤ諸語全体についての広い知識が必要である。

第三に、マヤ文明に対する知識はもちろん、メソアメリカ全体の文化の知識が必要である。たとえば、夜は九つの王によって支配されていたという知識は、メキシコ高原のアステカ文明から

得られた。もしその知識が得られなかったなら、九つの変体をもつGと名づけられた文字の意味はわからないままであっただろう。このように、マヤでは消えてしまっていた知識が、また、マヤだけみていては理解できないものが、メソアメリカという文化共同体ともいえる地域のなかのほかの文明から得られる可能性は大きい。

これらの基本的条件を満たす作業は、一朝一夕にできるものではない。それはあまりに大きすぎる。筆者にも欠けている。だが、これらの条件が満たされなければマヤ文字の解読はできないというのではない。これらは研究の途中で培われていくものであって、最初から必要なものではないからである。しかし、この基本的条件を満たすべく努力していく必要はあろう。ともかく、まずはマヤ文字に親しみながら、少しずつ関連する知識を蓄積していくよりほかはない。

マヤ文字の解読史をみると、このような条件を満たした上で解読しようとした学者が少なすぎたことがわかるのであるが、これらの条件にもまして大切なことがある。それは十分な批判力をもつことである。もちろん、先にあげた基本的条件をある程度は満たしていなければ批判できないわけであるが、批判力をもたなかったために、おびただしいまちがいが蓄積されてきたのである。

十分な批判力をもたず、権威者のまちがった説を鵜呑みにしている例は、枚挙にいとまがない。たとえば、マヤ人の科学が進んでいた証拠として、マヤ人は一年を三六五・二四二〇日と計算し

ていたということをあげることがある。それは化学者ティープルが一九三〇年に唱えた説で、マヤ学の権威者トンプソンが認めたため、いまでも世界に流布しつづけている説である。これはまったくでたらめな説だといったら、そういったほうが疑われるかもしれないほど、少しでもマヤに関心をもつ人ならだれでも知っている説である。だがこれは、まちがった前提に立ち、まちがった計算を重ねていって導かれた、まったく根拠のない説なのである。

これはほんの一例にすぎない。マヤ文字の解読史は誤謬に満ちた歴史といったが、一つにはこういう批判的態度が欠けていたことも原因である。

数々の説がこれまでだされてきたが、それらははたして正しいのか、矛盾のない説なのか、なまの文献にあたり、自ら検証していく批判的態度が必要である。

私たちは、先人がなしてきた仕事を、正しいことは正しいとし、まちがっていることはまちがっているとはっきりいえる力をもたねばならない。それというのも、マヤ文字はいまだ解読されているのではないし、日々新しい意見がだされているからである。ひじょうに流動的で、なにが正しいかわからない、混沌とした世界であるから、正しいこととまちがっていることを見分ける目が必要なのである。

定説など信じてはならない。マヤ人がピラミッドを作るのに一つ一つ石を積みあげていったように、私たちも、一つ一つ確信のもてる証拠を積みあげていく必要がある。基本的なものから一

歩一歩進んでいかなければならない。

では基本的なものとはなにかといえば、それは、マヤの碑文の多くを占める暦である。マヤ人は時の計算に没頭していたともいわれるくらい、いろいろな暦を使って時の流れの一点を定めようとした。たくさんの暦が組み合わさっているので、最初はとまどってしまうかもしれない。しかし、一つ一つゆっくりみていけばそんなに問題はない。

たしかに暦には、私たちの理解しがたい観念、日や月を神とみる意識など、やっかいなものが含まれる。それらはなかなか把握しがたいものである。しかし、碑文に刻まれているマヤの歴史をみようとする場合には、暦の仕組さえ知っておれば、そういったことはさしあたって問題にはならない。

文字の解読から再構成される歴史は十分に興奮させられるものである。だが、そこにたどりつくためには、まず石切りからはじめなければならない。そのやっかいな基本的作業をぬかすならば、再構成した歴史のピラミッドは、それこそジャングルのなかにくずれ去ったピラミッドとおなじ運命をたどることであろう。

そこで本書では、まず暦からはじめ、そのなかで文字についての基本的なものを一つずつ理解していくことにする。そしてそれらのしっかりした基礎の上に立って、テキストをみていくことにしよう。

テキストの形態

私たちの出発点はランダが残した暦とアルファベットである。だがその前に、文字にとりかかるための準備の最後として、マヤのテキストはどのような形態をもつものかを述べておこう。

マヤ文字のテキストは、刻まれたものと描かれたものの二つに大別できる。刻まれたものとは碑文のことであり、描かれたものとは絵文書のことである。どちらも、扱っている内容や年代など、いろいろな面で異なる。たとえば素材に関していうと、碑文は石碑や祭壇、リンテル（楣石）、パネル（壁板）など、おもに石に刻まれたものであるのに対し、絵文書はいちじくの木から作られた紙に描かれたものである。内容はどうかというと、碑文はおもに歴史的事柄を扱っているのに対し、絵文書はおもに二六〇日暦という宗教暦にもとづいた儀式的な事柄を扱っている。内容が異なっているので、当然、碑文にあって絵文書にない文字があるし、その逆もある。年代も、碑文は二九二年から九〇九年までの古典期であるのに対し、絵文書は十三世紀以降である。そのため、書体も当然違う。

このようにいろいろな面で異なるが、両方ともおなじマヤ文字である。文字からみたマヤの歴史は、二九二年から九〇九年までのあいだに刻まれた碑文の分析から得られるが、その理解のためには、十三世紀以降に描かれたといわれるドレスデン、マドリッド、パリ、グロリアの四つの

絵文書や、十六世紀のスペイン人征服後に書かれた、たとえばランダの書やチラム・バラムの書などの資料を活用しなければならない。

ところで、描かれた文字としては、絵文書のほかに、壁画や土器の文字もある。これらは碑文と同時代のものであるが、絵文書の書体に近いので、描かれたものの範疇にここでは入れておこう。壁画は、ボナンパックやワシャクトゥンの壁画など、有名なものがあるが、数はそれほど多くない。それに対し、土器は豊富に出土している。土器の文字はこれまで装飾物とみられ、あまり重要視されなかった。だが、壁画はもちろん、土器の文字も、碑文を理解する助けとなるばかりでなく、碑文にない新しい情報を伝えていることが多く、無視するわけにはいかない。しかし、その重要性はやっと認識されはじめたばかりである。

先に、マヤ文字の研究は基本的なことからはじめなければならない、それが暦であるといった。なぜかといえば、十六世紀にスペイン人が到来したとき、当時でも使われていた暦についての記述が、暦の文字とその読み方まで添えて残されたからだ。さらにその暦は、マヤ文字資料の初めから終りまで、そして現在にいたるまで、連綿として用いられつづけてきたものだからである。また、暦というのは、まず仕組さえわかればほぼ用をなすのであり、文字がどうのこうのという必要がさしてないからでもある。それゆえまず、暦の文字とその読み方を検討することが、マヤ文字の理解を深める最初の作業になる。

テキストの読み順

では、暦がたくさん記されているテキストは、いったいどんな形をしているのであろう。

テキストの中心となるものは石碑である。石碑はふつう前面に、王または神官とみられる着飾った人が刻まれている。そしてテキストは側面または裏面に刻まれている。

文字はふつう二列に並んでいる。テキストは二列だけのものもあるが、たとえばパネルのテキストのように、数列、数十列からなる長いものもある。

テキストは角がいくぶん丸みをおびた四角なますに分割されている。そのますのなかに文字は納まっている。

ある文字に言及する場合の必要上、ますには、それぞれ左から右へA、B、C、D……と名がつけられ、上から下へ1、2、3、4……と番号が打たれている。たとえば、図1の斜線の文字はC3となる。

読み順は、上から下へ、左から右へ、二列が対になって読まれていく。二列を左、右、左、右と読んでいき、下段までくると、その右側にある次の二列を対に、左、右、左、右と、上から下へ読んでいく。図1の上の例でいうと、A1、B1、A2、B2、A3、B3、A4、B4、C1、D1、C2、D2……となる。

水平一行のテキストもあるが、その場合は、左から右へ読まれる。

二段の場合は、二列が対になって読まれるので、図1の下の例の場合だと、A1、B1、A2、B2、C1、D1、C2、D2、E1、E2となる。最後が例のように一列あまったとしてもおなじで、最後の一列は上から下へ読まれる。

三列の場合も同様で、まず二列が対になって読まれ、下段までくると、第三列目が上から下へ読まれる。しかし、三列が一対となって読まれる例もないではない。

特殊な例としては、コパンの石碑Jのように、むしろ織りの複雑な形をした文字配列をあげることができる。また、円形に文字が配列された祭壇もある。この場合、読みはじめる場所が問題になる。土器の文字で周囲ぐるりに描かれている場合も同様である。このような場合、付随する場面が手がかりになり、テキストは主人物の真上、または少し左寄りからはじまる。ふつう、日付が記されているので、日付の順が決め手となる。

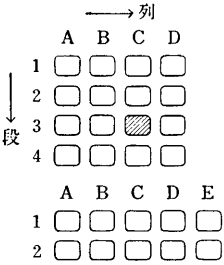


図1　テキストの読み順

以上、例外はあるが、それはそのつど解決できる問題であり、ここで読み順の一般的原則をまとめると、

「二列を対に、上から下へ、左、右、左、右と読んでいき、下段までくると、次の二列を同様に読んでいく」

ということができる。

ふつう、文字は左側を向いているので、いま述べた原則が適用されて読まれていくのだが、右から左へ読まれる場合もある。たとえば、ヤシュチランのリンテル25やパリ絵文書の二三、二四ページにみられるものがそうで、その場合、文字全体が反対向きに書かれている。しかしこのような例はごくわずかしかないので、問題はない。

一ますのなかにはふつう一文字が納まるが、それ以上の文字が押し込まれることもある。二つの場合だと、ますは垂直に、ときには水平に二分される。各々の文字の形は、ますが縦に半分に区切られた場合は高さが幅の倍になり、水平に区切られた場合はその逆になり、いずれにしても文字の変形はまぬかれない。

ますが三分、四分されることもある。一般に二分化や四分化はテキストの後半になって現われることが多い。それによって生じる文字の大小は、文字の重要さに関係がないので、それは、あたかも書記者が書くための余白がなくなったために、やむをえずやった工夫のように思われる。

これら一ますに納まった文字に言及する必要がある場合は、アルファベットの小文字を使って表わすことになっている（図2）。

文字の構成

ここで、文字についてふれておくことにしよう。本書では、文字は文字素から成り立つものと

する。そして、文字素は文字素性または要素から成り立つものとする。つまり、文字の最小単位は点や線などの文字要素（素性）であり、それの一定数が一定の形と配列をもって構成されるものが文字素である。たとえば、月チェンの文字をみてみよう。図3はどちらも月チェンの文字である。図3の1は四つの文字素から成り立っている。しかし図3の2では、三つの文字素しかなく、図の1の左側の文字素、これは黒を表わす文字素であるが、それが、2の一番大きな文字素のなかにはいっている。この場合、 は黒を表わす文字要素ということができる。

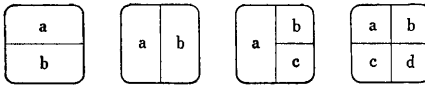


図2　1ますに納まっている文字の呼び方

図3　月チェン

いまみたことでわかるように、文字とは、文字素または文字素の集合が、一つの意味または指示物を表わす場合に用いることばとする。たとえば、先にあげた例は、月チェンという一つの決まった指示物をもつ文字である。そしてその文字は、四つの文字素から成り立っている、ということができる。

文字を、文字素と要素に分けたのであるが、見方をかえていえば、文字は、接字（Affix）と主字（Main Sign）からなるということもできる。マヤ文字は、ふつう、大きな文字素に小さな文字素がくっついてできている。この場合、小さな文字素を接字、大きな文字素を主字といっている。じつはこれは、文字のなかでのたんなる位置や大きさの違い、つき方の違いによって分けた分類にすぎない。接字が意味を変えず

に主字になることもあるわけで、大きな文字を大文字、それにくっついて生起する小さな文字を付随文字とか付属文字、または付字といってもいいわけである。しかしここでは、主字と接字ということばを使うことにする。

接字は主字の上と左につく接頭字と、右と下につく接尾字に分けることができる。左と上、右と下はそれぞれ移動可能であることがわかっている。もちろん、左にだけ、上にだけといった、ただ一つの場所にしかつかない接字もある。一般には接頭字と接尾字の交替はおこらないが、ある接字がおなじ主字に対し、どちらの位置にも生起する場合があるし、またある文字素に対しては接頭字として、違う文字素に対しては接尾字として用いられることもある。文法的接辞の役割を果たす文字素や、修飾語となって接字となる文字素があることなどはわかっているが、結局のところ、接字と呼ぶ文字素の働きは十分にわかっていないのである。

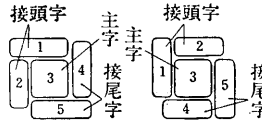


図4　文字の読み順

一般に接頭字と接尾字の交替はおこらず、読み順は、接頭字—主字—接尾字の順になると思われている。しかし、その順を守って解読を進めている人は少ないようであり、また、テキストが十分に読み込まれていないので、そのようなはっきりした読み順がマヤ文字に存在するのかどうかもまだわかっていないのが現状である。しかし、いまあげた読み順に従って解読をしていくことは、一つの指針であり、本書ではその指針にもとづいて解読を試みていこう。

左と上に接字がある場合、どちらも接頭字と名づけたので、どちらを先に読むのか問題になる。右と下に接字がある場合も同様で、どちらを先に読んでいいのかが問題になる。このような場合、前接字や上接字、後接字や下接字ということばを使ったほうがいいかもしれない。これらの読み方の順については、これまでのところ、

「左と上にある場合は、左上端を占める接字を先に読む。右と下にある場合は、右下端を占める接字をあとに読む」

とみるのが一番ふさわしい。例外はもちろんあるが、ほぼすべての場合に適用できるので、これも解読のときの指針にしておこう。

少し初めから細かいことにはいりすぎたようだ。細かい問題は実際に文字をみるときに考えることにして、さっそく、暦の文字からはじめることにしよう。